

「放蕩息子」のたとえ

ルカによる福音 15:1-3、11-32

(そのとき、) 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。

「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。

『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠り

なさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

説教

ふつつなら罪を犯したら罰を与えられます。しかしキリスト教の考え方では「罰なし」でも罪は赦されます。

「罰なし」ではずるい、悪いことはやったもん勝ち???

キリスト教でも世間の常識と同じように罪と罰をセットにしている宗派もあります。しかし、キリスト教のスタンダードな考え方は「人間はだれでもみんな罪びとでイエス・キリストによって赦された」です。

「放蕩息子の帰還」といわれるきょうの朗読箇所は聖書のなかでも指折りのエピソードで、とても印象に残ります。「回心」のモデル、悔い改めのお手本としてイースターの時期にあわせて朗読します。

でも、きょうの福音をよくみると弟は回心した、悔い改めたとは書いて

ありません。

**お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう
息子と呼ばれる資格はありません。ルカ 15:21**

悔い改めます、回心します、だから赦してではなく、罪を犯しました、と告白しているだけです。

弟は罪を認めた、そして父は息子を赦した。

罪を認めた、赦した、とここでシンプルに終わってもいいのですが、イエスのたとえ話にはひねりがあります。

兄が登場します。

兄は自分は善人だ、いい息子だ、孝行息子だ、弟みたいな放蕩息子ではない、罪人とは違うと父にせまります。

このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。

ルカ 15:29-30

兄の怒りの訴えをきいた父は「まあまあまあ」となだめてこのたとえ話は終わります。わたしはここで終わってよかったと思います。もし続きがあるとすれば兄弟仲良くなりましたではなく、兄と弟の壮絶なけんか話になりそうです。

弟は自分を罪びとと告白しているのに、兄は自分は無実、いい人で罪びとではないと主張しています。もし自分がこの兄の立場だったらと思うとちょっと恐ろしい気になります。この兄よりもっとひどいことをやらかしそうです。

「人間はだれでもみんな罪びとでイエス・キリストによって赦された」という教えからすると救われているのは弟です。あまりいい子ちゃんすぎると救いから遠のくのかもしれません。主の平和がありますように。

使徒信条

わたしは、天地の造り主、全能の父である神を信じます。

また、その独り子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。

主は聖霊によって宿り、おとめマリヤから生まれ（ここで礼をする）ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちからよみがえり、天に昇られました。

そして全能の父である神の右に座しておられます。そこから主は生きている人と死んだ人とを審くために来られます。

また、聖霊を信じます。† 聖なる共同の公会、聖徒の交わり、罪の赦し、体のよみがえり、永遠の命を信じます アーメン

共同祈願

いつくしみ深い神に信頼をこめて祈りましょう。

- ・あなたの民の信仰の歩みを導いてください。広い心で迎えてくださる神の愛に養われ、自らも隣人を愛する人となることができますように。
- ・命の危機にある人たちのために、必要な援助を差し伸べる活動を強めてください。与えられた命を守りあうことができますように。
- ・洗礼志願者をあなたの光で照らしてください。キリストを信じる人の交わりの中で、神と人に仕える喜びを知ることができますように。
- ・（あなたに必要な祈りを追加してお祈りしてください）

神はあわれみ深く、ゆるしを与えてくださる。

わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン